

# 若き日の山脇百合子先生

鈴江 璋子

立春の朝、電話が鳴った。山脇先生の訃報を多比羅先生が伝えてくださったのだ。1月31日、退院後3日目、ご自宅でのことで、お見送りもご家族だけでなさるよし。もう一度お顔を見たいのだけれど「わたしたち、どうしましょう。」昨秋は令息山脇智夫画伯の個展がなかったので、気になってはいたのだ。山脇百合子先生（1918-2019）は日本ギヤスケル協会の設立者として、また実践女子大学英文学科初の女性教授として、激動の100年を生き抜かれた。「100歳。ご立派よね」「ええ、でも寂しい。」そう、生きていていただきたかった。協会設立30周年を見届けてくださったのだから、立派な、見事なご生涯なのだが。

山脇先生は小説家横山美智子の長女として生まれ、次女で画家のてるひさん、三女でバレリーナのはるひさんとともに、名門の美人三姉妹として女性誌のグラビアを飾る存在だった。私は1968年に龍谷大学助教授から実践女子大に転じて以来のお付き合いなのだが、山脇教授は優雅で美しく、英文学科のプリマとして、いつでも、にこやかに立ち上がる用意ができていらっしやった。

先生は筆が速かった。興が乗ると原稿用紙30枚くらいは一晩で書き上げられた。これはおそらく新聞記者時代の修練によるものだろう。先生は早稲田大学を卒業後、朝日新聞社に記者として入社された（1944-47）。折しも第二次世界大戦・太平洋戦争が終局に至る段階で、朝日新聞社ベルリン支局の山脇亀夫特派員からは、激烈なヨーロッパ情勢が刻々と伝えられる。暗号で送られるその送信を受け、暗号を解いて日本語の記事に仕上げるのが、横山百合子記者の仕事だった。百合子記者は電文を読み、こういう記事を書くのはどういう人だろう、と思うようになった。「煩さがられるほど質問して、一生懸命追いかけたのよ。」この聡明な受け手に対して、送り手の思いも募る。抑留の後、アメリカ経由で、ついに山脇亀夫氏（1912-92）は帰国した。英国文化振興会資金によるリヴァプール大学大学院留学（1952-53）が実現した時、もう二人は結婚され、お子様も二人おありだったので、百合子先生は留学中も日本に置いたご家族を思って「気が気ではなか

った。」

山脇亀夫氏は西欧のマナーが身についた素敵な紳士である。山脇東洋のご子孫と伺っている。「背広やネクタイは自分で選んで、私には選ばせないの」とのことで、逆に亀夫氏お気に入りのテイラーが百合子先生を見て「寸法など全然計らずに、見ただけでこれを作ってくれたのよ」と、白地にピンクのストライプのすっきりした夏ジャケットを、大切にしていらっしゃった。亀夫氏はずっと朝日新聞社の要職に在ったので交際も広く、智夫画伯の個展に常陸宮華子妃殿下をお招きになったこともあった。愛犬のプービエール・デ・フランドールにかかわるお付き合いだった。渋谷区大山町のお宅には、和田英作画伯による横山美智子さんの美しい肖像画と、大きな、見事な市松人形が置かれていた。

リヴァプールから帰国後、しばらくは模索されたが、実践女子学園短期大学助教授に採用された(1960)後は順調に、実践女子大学教授(1966)へと昇進されている。理事長から「女子大生に合うように、女流作家のことを教えてほしい」と依頼されて少々困り「プロンテでは実践の学生には強すぎる。ギヤスケルがいいだろう」と判断されたと伺った。学部の「女流作家論」、大学院の「作品研究」は博士論文『エリザベス・ギヤスケル研究』(1974)へと結実した。山脇先生定年(1989)後のお仕事として、実践女子大は日本ギヤスケル協会の設立と運営に助力と後援を惜しまなかった。愛弟子たちは会員・学生会員として重要な役割を果たした。山脇先生は社会に出る女性たちのパイオニアとして、芯の強い活動を続けられたのだった。

#### 追記

本稿作成にあたっては、山脇智夫氏および実践女子大学香雪記念資料館事務室部長のご助力をいただいたことを記して御礼申し上げます。

(日本ギヤスケル協会第2代会長、実践女子大学名誉教授)